柳田国男芭蕉論の考察

――国語教育の立ち場から――

小山　清

はじめに

今、誰かが私にむかって、「柳田国男の本を読んでみたい」ともらしたら、私は何のためらいもなく、『木綿以前の事』をすすめたい。なぜかといえば、そこに物を見つめる鋭い目が光っているからである。われわれはすべての日常生活が、ずっと前から今われわれのまわりにあるとおりだと漠然と信じている。しかし、それがいかに大きな誤解であるか、柳田国男は多くの実例でもってあきらかにするのである。三度の食事、木綿の衣服、畳の敷いてある部屋、毎日話すことば、それらはすべて時の流れの一点においてのみ存在していることが示されているといっていい。

杉浦明平は「文学」（一九六二・一）に、「『木綿以前の事』のおどろき」なる一文を載せ、柳田国男が「風俗や社会のうつり変りや日本人の心やことばについてだけでなく、文学を見る方法をもまた教示してくれた」と述べている。そして、さらにそれを疑う人にむかっては、「かれの芭蕉論を読め。そこには、芭蕉論の出発点と到着点とが同時に示されている」と続けている。

柳田国男が芭蕉、ひいては俳諧について論じていることは確かである。しかし、その論は数多くの著書に散在しているのであって、一つの体系をもったものではない。われわれはまず柳田国男の芭蕉論を一つの体系として把握しなければならない。私はここで『俳諧評釈』、『木綿以前の事』、『笑の本願』を中心にして、柳田国男の芭蕉論にふれ、そのあとそれを学校国語教育の上に位置づけてみようと思う。

一　芭蕉の俳諧

柳田国男が「笑の文学」と呼ぶ俳諧は、その根本において、歌とちがっている。それは俳諧がうちに笑いを含むからである。笑いを含むがために、俳諧は破格でもある。柳田国男は笑いの文学の特徴を、『笑の本願』（一二～一三ページ）で、次の三つの点から指摘している。

(1)構図、すなわちコンポジションのないこと。
(2)概して短かく、また短かいほどおもしろいこと。
(3)記録書物の形として世に出ることがむずかしかったこと。

したがって、俳諧を理解するためには、まず笑いについての考察からはじめなければならない。

二

笑いは元来、戦闘の一部であったといわれている。柳田国男が『笑の本願』（一四三～一四四ページ）で、「神に禱りの詞、魔物には呪文、同じ人間どうしでも協力の為に歌謡が有る如く、争って相手を制するには嘲弄といふものがあって、敵を笑はるゝ者とし味方を笑ふ者とすることによって、屢々武器腕力の行使を節約した」と述べているように、どっと笑って自分のすぐれていることを知る方法であったのである。

しかるに後世になり、社会が拡大し平和が必要になってくると、今までのように やたらに 周囲を笑ってばかりいられなくなってきた。だからといって笑いという大きな快楽を忘れてしまうわけにいかない。ここにおいて、柳田国男のいう「笑の転用」が生じたのである。すなわち、「一方には昔々と称して、現在とは交渉の無い想像上の笑を、時々の入用の為に大切に貯へたと同時に、他の一方には富あり力ある者は、一定の給禄を以て進んで笑はせてくれる者を雇ひ抱へて置くことにもなった」（『笑の本願』一二五ページ）のである。現在と交渉のないものを笑うのも、進んで笑われようとするものを笑うのも、ともに世の平和を乱すことがなかったからである。

給禄をもって進んで笑わせてくれるもの、たとえば曾呂利新左衛門のような自らを嘲るものが出て、笑いはじめて価値ある商品となりえたといえるかもしれない。しかし、甘んじて笑いを献ずるものとて、心ひそかには憤怒の情をもやしたにちがいない。強いものが勝手気ままに笑っていい世はすでに去っている。この間にあって笑いはいったいどこへいきつけばよかったのであろうか。柳田国男は芭蕉こそ、笑いの安らかな入口を示した人だと説明している。

三

柳田国男は芭蕉の俳諧を、「高笑ひを微笑に又は圧倒を慰撫に入れかへようとした念慮は窺はれ、しかも笑って此人生を眺めようとする根原の宿意は踏襲して居る」（『笑の本願』七三ページ）と述べ、さらに、荒木田守武のように、何でもかんでも笑い、そして笑わせ続けようとするのではなくて、「本当に静かな又朗かな生活を味ひたいと思ふ者に、親切な手引きをしよう」（同七三～七四ページ）としたのだと評している。

俳諧は何でもないただの人、極度に平凡に生きている人、もっと進んでいえば乞食や盗人までも、その対象として取りあげることをためらわない。それどころか、むしろそういう平凡な人生のもつお

かしさの中に、一つの深々とした哀れさを読みとろうとするものなのである。柳田国男はしんみりした常人の感情が、自在に至るところに盛られるようになったことを、「以前の笑ひの文学には全然見られなかった」（『木綿以前の事』三一八ページ）といい、そして、俳諧が芭蕉によって静かな朗らかな生活を味わいたいものの親切な手引になるに及んで、「無始以来の笑ひの本願は、彼に於て成就したのである」（『笑の本願』七九ページ）といっている。この笑いの本願の成就こそ、柳田国男が芭蕉の俳諧に指摘する芸術的価値なのである。

四

俳諧が何でもないただの人をも対象にしたことと関連して、女を俳諧の上で詠嘆するようになったことを、柳田国男は「芭蕉の大きな事業でありました」（俳諧評釈続篇、定本柳田国男集第十七巻、五五四ページ）と述べている。つまり、それまでは女を俳諧の上に詠嘆する風習が極度に制限されていた。というより、恋は一巻の上に色を添えたのは確かなのであるけれども、その題材の選び方が局限されていたのである。

柳田国男は芭蕉の俳諧に出てくる女について、その種類が多く境涯が広々と変化している点を高く評価している。次に評釈ともどもその一例を引いてみる。

黒木ふすべる谷かげの小屋　北鯉
誰がよめと身をやまかせん物おもひ　芭蕉
あら野の百合に涙かけつゝ　嵐蘭

是などは俳諧の代表的な例でありまして、前句はたゞ一通りの山村の景なのを、一挙にしてそこに住む一人の淋しい娘の、心の奥底へ焦点を移して見たのであります。山の一つ屋で年頃になった女などは、折々は斯ういふ寂しい晩方を持ったにちがひないのですが、それに心を留めた俳人は今までに無く、まして此様な形を以て、この境涯を描かうとする試みなどは、後にも先にも是がたゞ一つです。（同、五五七ページ）

山の一つ屋の年頃の女の心さびしさを思いみた芭蕉は、まさに「文芸に豊かなる可能性を付与した」（同、五五四ページ）といっていいのである。柳田国男は『木綿以前の事』で、「人生の片隅の寂しさをも見落さなかったのが、我翁の俳諧であった」（二四一ページ）と述べている。

五

俳諧に対する注解はきわめてまちまちである。黒と白ほどちがったものも少なくない。わずか二百数十年ほど昔の作品に、なぜ一方が正しいとすれば、他方はでたらめという解釈の不定が生じるのであろうか。柳田国男は(1)変則語法と省略、(2)付きすぎの軽蔑、(3)社会組織の特殊性（『木綿以前の事』二七九ページ）の三つをあげ、その中で社会組織の特殊性、すなわち「連衆の力」が主なる原因であるとしている。

この人々の間には通常ならぬ相互の理解があり、それから又最も容易なる共同感銘の、言語の必要を超越するものが有り得た。是が斯ういった短かい句形を以て、時には驚く様な人情の深みに

まで、入って行くことの出来た理由であると同時に、時代環境を異にする門外漢には、よほど気をつけても判らぬ点が、少なくない所以かと私は思って居る。（同、三二五～三二六ぺ）

つまり、解釈の不定は作者と後世の読者の間にある生活経験のずれであり、他の文学作品にくらべて著しいのは、「読者を限定して、銘々の腹の中のわかる者だけで鑑賞し合った」（同、三二八ぺ）ためなのである。

「猿簑」の巻五々はつしぐれの巻々の終わり近くに、

押合て寝ては又立つかりまくら　芭蕉
たゝらの雲のまだ赤き空　去来

というのがある。柳田国男は『木綿以前の事』（三二九ぺ）で、それを例にあげて、「是は普通は旅の鋳物師の、朝早く立つ処と謂って居るが、幸田さんは雲まで赤くなるやうなタタラ吹きは無いから、信州とか筑前とかの地名だと言はれる」と述べている。

また、「冬の日」の

鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉

を例にあげ、「この〃風吹ぬ〃を私などは〃風吹かぬ〃と解し、先生は〃風吹きぬ〃だと見て居られる」（同、三二八ぺ）と述べている。

六

解釈に不定を生じている部分は、前代生活の普通の記録には省みられなかった凡俗の興味深い生活を保存していると考えることができる。柳田国男は「僅かなる注意と比較とによって、単に事実を明かにしうるだけで無く、同情ある同時代人の之に対して抱いて居た感覚を、窺ふことが出来る」（同、三三九ぺ）とする。裏返していえば俳諧ほど活きた史料を後世に伝ええたものは少ないということである。「家の生滅異動と婚姻制との交渉などは俳諧を主要の史料として利用せぬ限り、殆とその近世の変化を明かにし得まい」（同、二八八ぺ）といい切ることもできるのである。活きた史料は、柳田国男が芭蕉の俳諧に指摘する文化史的価値なのである。

七

家の生滅異動と婚姻制との交渉のような大げさなことでなくても、木綿が農村には入って、麻の衣類に代わっていった時代の様子、村に住む寡婦の生計が、農具の改良によって激変を受けたことなど俳諧からあきらかになるのである。『木綿以前の事』（二七五ぺ）から、その一例を引いてみる。

帷子（かたびら）は日々にすさまし鶯（もず）の声　史邦
籾一升稲のこき賃　芭蕉
蓼の穂に醤油の徽（かび）をかき分けて　岱水

此一聯のつけあひの意味は、百舌の啼く頃までまだ帷子を着て居るやうな人が、稲を扱く仕事の手伝に来て一升の籾に有付き、おまけに酢か何かの御馳走になって行く光景を想像したもので、私は多分第一句の主人公は女性であらうと思って居る。俳聖芭蕉の行脚をして居た頃までは、田舎の秋にはまだ斯ういう情趣が普通に見られたのである。

つまり、農具が改良されるまで村に住む寡婦は、あちこちに雇われて籾を何升かもらい生計を立てていたのである。しかし、農具が改良され人手がはぶけると、自分で耕作する力をもたない寡婦は生活に窮していった。後家泣かせという稲扱器の普及がそれである。

柳田国男は「俳諧には時代の生活が現はれて居る」（同、二八〇ぺ）といっている。軍書から人情本まで何万種という小説はあっても、その中に書き伝えておかなかった平凡人の心の隅々が、俳諧に保存せられているというのである。しかも、その上にありがたいことは、「多くの古い知識が只ひからびた腊葉のやうな形で保存せられて居るに反して、俳諧は各々其当時の活きた姿のまゝで伝はって居る」（同、二八七ぺ）のである。

ここにおいて、柳田国男は「この特殊なる文芸の総体から、滲透して居る民衆生活を味って見ることを心掛けなければならぬ」（同、三四〇ぺ）という一つの結論を導き出してきている。

八

以上のことから、柳田国男が芭蕉の俳諧に感謝しなければならないとする点をまとめれば、次の二つになるであろう。

(1)古文学の模倣を事としなかったこと。

(2)古くからの言い伝えに忠実であったこと。

（『木綿以前の事』　三三二ページ）

古文学を模倣しなかったというのは、ロマンチックな古臭い型を棄て、同時に談林風の空想の奔放を抑制したことである。いいかえれば、笑いの本願の成就という芸術的価値である。

古くからの言い伝えに忠実であったというのは、凡人大衆の生活を描き、しかもそれを巧妙という以上の写実でもって、正確に後世に伝えたことである。いいかえれば、活きた史料という文化史的価値である。

柳田国男は芭蕉の心がまえを評して、「奇警にも奔らず、さりとて又常套にも堕せずして、必ず各自の実験の間から、直接に詩境を求めさせて居た所に新鮮味があった」（『木綿以前の事』二八一ぺ）とする。柳田国男が芭蕉の俳諧に愛着をもったのは、この新鮮味があったためなのである。

国語教育と芭蕉

一

柳田国男の芭蕉論を国語教育の上に位置づけるに先立って、芭蕉が教科書にどう取り入れられているかをみておきたい。私が目を通した教科書は、昭和三十八年度から改訂になる古典甲・古典乙Ⅰあわせて二十六種である。

まずはじめに、芭蕉がどの作品形態で教科書に収録されているかといえば次の表のとおりである。

〈表一〉

奥の細道		26
野ざらし紀行	1	
幻住庵記	1	

笈の小文	1
発句	24
連句	1
鑑賞文	7
俳論（去来抄など）	10

奥の細道はすべての教科書に収録されている。むろん抄録であって、冒頭部・平泉の一節が多い。発句は二つの教科書が欠いていたが、一つは鑑賞文、もう一つは野ざらし紀行が載っているためであって、実質的には奥の細道と同じように、すべての教科書に通じているとみてよい。したがって、芭蕉に関する限りは奥の細道と発句の二本立てとみることができる。連句を収録していたのは、中央図書からでている遠藤嘉基編「高等古典下（乙I総合）」である。

次に奥の細道をも含めて、多くとりあげられている発句を列挙してみる。

〈表二の1〉

※草の戸も住替る代ぞひなの家	15
※夏草や兵共がゆめの跡	16
※五月雨のふり残してや光堂	16
※行はるや鳥啼うをの目は泪	19
旅に病で夢は枯野をかけ廻る	23
※閑さや岩にしみ入る蟬の声	24
菊の香や奈良はいくよの男ぶり	25
草臥て宿かる比や藤の花	26
※荒海や佐渡によこたふ天河	12
※象潟や雨に西施がねぶの花	14

（※印　奥の細道にある発句）

二十六種の教科書すべてに奥の細道が載っていることからして、当然、奥の細道に含まれる発句が多くなっている。奥の細道をのぞいてみると、〃草臥て〃の句以下、次のような順になる。

〈表二の2〉

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉	10
むめがゝにのっと日の出る山路かな	10
秋深き隣は何をする人ぞ	9
塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店	9
海くれて鴨のこゑほのかに白し	8
初しぐれ猿も小蓑をほしげ也	8

芭蕉の発句は延四一九を数える。それをこの時代の他の俳人とくらべれば、次の表のとおりである。

〈表三〉

芭蕉	419	其角	14
蕪村	184	凡兆	10
一茶	102	去来	9

芭蕉・蕪村・一茶の三人が、とびぬけて多く取りあげられていることがはっきりしている。中でも芭蕉は蕪村の二倍強、一茶の四倍強、全体ではほぼ五〇パーセントをしめている。それだけに芭蕉の俳諧は国語教育の上に正しく位置づけられねばならない。

二

多くの教科書に「近世俳句抄」という単元名がみえている。俳句ということばは明治になってつくられたことばである以上、俳諧における発句と呼ばれるべきものではないであろうか。俳諧はいくつかの句が連合して、ある一つの効果をあげたものであり、一句の任務は分担であった。ここにおいて、発句のみをぬきだして鑑賞することにどれだけの意味があるのかという問題が生じてくる。私の目にした二十六種の教科書のうち、ただ一つの例外をのぞいては、すべて発句を取りあげている事実からして、この問題はきわめて大きいといわねばならない。

柳田国男は『笑の本願』（七七ページ）で、もし発句が俳諧を示すならば、「芝居の馬の脚が嘶くやうなものである」といい、さらに『木綿以前の事』（三〇四ページ）では、「一言でいふならば発句はきらいである。寧ろ発句の極度なる流行が、却って俳諧の真の味を埋没させて居るのではないか」と疑いかつ憂えている。

三

芭蕉の俳諧が笑いの本願を成就させたことについては先にみたとおりである。芭蕉の俳諧は笑いを欠くべからざる要素と認めた点において古い伝統を継いでおり、それと同時に笑いを俳諧の全部としなかったのでもある。柳田国男はその理由をもって、芭蕉の俳諧が「正風と名のる権利がある」（『木綿以前の事』三一七ページ）といい、「笑ひを取扱はない蕉門の俳諧は一つも無かったと共に、発句から先づ人を笑はせようとするやうな連俳といふものは一つだって無い」とつづけている。

先にみた女の問題にしても、初めの表六句では恋愛は取り扱わないことになっていた。それはわれわれに与える感動がきつく濃やかで、「序破急の原理を紊し、連句総体の調和をそこなふ恐れがあった」（女性と俳諧・定本柳田国男集第七巻、四七八ページ）ためである。芭蕉が談林以前の百韻をやめ、三十六句の歌仙にしたのも全体の調和を考えたからにほかならない。

ともかく、表六句をのぞけば、恋愛が大いに俳諧をにぎやかにしていることは確かである。特に芭蕉にいたっては、その種類が多く境涯が広々と変化しているのである。しかるに、今日俳諧として鑑賞するのが発句だけであるとは、いったい何を意味しているのであろうか。柳田国男はたくみな比喩でもって、その非を難じている。

店先にはまじめくさった年輩の男たちばかり出入して居るのを見て、これは女などには用の無いところと、奥には何があるのかと覗いて見ようともせずに、素通りした人の多かったのも無理はありませんが、奥はその暖簾の陰にこそ、紅紫とり〴〵の女の歴史が、書かれてあったのであります。（『木綿以前の事』自序二～三ページ）

したがって、発句だけを取りあげてみると、それが生まじめで格別笑うようなものでないことは当然のことである。柳田国男が『木綿以前の事』（三一七ページ）で、「俳諧といふ語の意味を、よほどこぢつけ拡張しない限り、今日の所謂俳句は、それだけでは俳諧でないといふことになるのである」と述べるのは正しい。

柳田国男は近来の芭蕉論が、〝古池や蛙飛こむ水のをと〟や〝かか

れ朶に烏のとまりけり秋の暮〃などの有名な五十句ばかりでなされている点を指摘し、「裸で取出して、そしったり讃歎したり無視したりしようとする近頃の鑑賞ぶりは、少し我まゝに過ぎはしないか」（女性と俳諧、定本柳田国男集第七巻、四八〇ペ）と危ぶんでいる。そして、さらに「七部集の話」（同、四九一ペ）では、「発句で芭蕉を論ずるのがすでにどうかして居る」といい切っている。

発句で芭蕉を論ずるのが誤りであるならば、発句のみを載せている現在の教科書は反省すべき大きな点を含んでいるといってよい。教科書の問題はひいては国語教育の問題である。芭蕉を発句のみからみつめたのでは、芭蕉の俳諧がなしとげた笑いの本願の成就も活きた史料もとうてい理解されない。その意味において、遠藤嘉基編の「高等古典」（中央図書刊）にある「猿蓑」の一巻〃夏の月の巻〃は、注目せられてしかるべきであろう。

四

芭蕉の発句で世に伝わるものは千をこえるといわれている。しかし、それを立句とした連句の巻は百に満たない。ここで連句の巻に残ったものが少ないから、それだけしか利用せられなかったという推論が成りたちそうであるけれども、笑いの文学はもともと記録物の形として世に出ることがむずかしかった事情を考えれば、一概にそう決めてしまうのは早計である。仮りにそうだったとしても、柳田国男のいうように発句は「いつでも或連句の催しの開口となることを、覚悟の上で作られたもの」（女性と俳諧、定本柳田国男集第七巻、四七九ペ）なのである。発句がそれだけ取り出されて讃歎されていい理由にはならない。

今、その例を奥の細道にある発句〃さみだれを集てはやし最上川〃にもとめてみる。この〃さみだれを〃の句のある出羽大石田の条は次なる一節である。

最上川のらんと、大石田と云所に日和を待。爰に古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、芦角一声の心をやはらげ、此道にさぐりあしして、新古ふみまよふといへども、みちしるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ。このたびの風流爰に至れり。（岩波文庫「芭蕉おくのほそ道」による）

右の一節にある「わりなき一巻」とは、〃さみだれを〃を立句とする次なる歌仙である。

さみだれをあつめてすゞしもがみ川　芭蕉
岸にほたるを繋ぐ舟杭　一栄
瓜ばたけいさよふ空に影まちて　曾良
里をむかひに桑のほそみち　川水
うしのこにこころなぐさむゆふまぐれ　一栄
水雲重しふところの吟　芭蕉

（『俳諧評釈』六一ペ）

つまり、奥の細道では〃すゞし〃が〃早し〃に改まっている。柳田国男はその理由を「外部の者の感じでは、梅雨の頃の最上川増水は、涼しいといふにはまだ早いので、従って句がやゝ不自然に聴えることを斟酌せられたものだらう」（同、六六ペ）と説明している。

ともあれ、現実にはこのときみんなが涼しいと感じたのであり、〃早し〃の句は〃涼し〃の句を背景にして理解されねばならない

し、〃涼し〃は連句との関連においてとらえられねばならない。

発句が連句の催しの開口となることを覚悟の上で作られたということは、具体的にいえば「聴かぬうちから先々のをかしさ面白さに、心をときめかす底の様態を見せて居なければならなかった」（『笑の本願』七八ペ）ことなのである。柳田国男はさらに風雅な譬え方をしている。

ちょうど此頃の四方の箱の如く、近くに寄って見ればまだ芽の萠しさへ無いのに、誰にも春だなと感ぜずには居られぬやうな、言葉には示せないほのかな何物かゞ含まれて居るべきわけである。（同、七八ペ）

この覚悟こそ、季語とか十七の字数とかよりも、発句のあるべきようを指導していたと考えていいのである。

五

柳田国男は『木綿以前の事』（三〇四ペ）で、「私は芭蕉翁の今の言葉でいふファンであるが、自分では是まで俳句なんか遣って見ようとしたことが無い」と述べたあと、正岡子規がその著述の中において、芭蕉の唱導した俳諧の連歌は文学でないと明言していることに鋭く反駁している。

柳田国男は子規の著述を具体的にさし示していないけれども、「俳諧反故籠」の中の一節「俳諧は何の用をか為すと問ふ者あらば、何の用をも為さずと答へん。何の用をも為さぬ者は即ち無用の者なり」（子規全集第四巻四七六ペ、改造社）をあげることができるであろう。

子規の俳諧無用論に対して、柳田国男は「どうしてこの俳諧の最も歴史的なる部分が文学であり得ないのか。もしくは少なくとも何故に文学でないと、ある優れたる一人の文人によって断言せられ得たのか」（『木綿以前の事』三〇六ペ）と迫る。この反駁は外国からもってきた文学の定義では包容できない特殊な文芸が日本にはあるのだという考えにつながっていく。

文学は社会的行動であり、複数の人の干与を条件とするけれども、俳諧にあっては「其人は限られ又内に在って、製作圏外の人は有るかも知れぬが省みられない」（七部集の話、定本柳田国男集第七巻、四九二ペ）のである。この点において、俳諧はまず現代の文学とちがっており、特殊な文芸といわれるところでもある。特殊な文芸を理解するにはそれなりの準備がいる。柳田国男の芭蕉論はいかなる準備が必要であるかを、大きくさし示しているのである。

おわりに

柳田国男は芭蕉の俳諧の偉大さを、笑いの本願の成就（芸術的価値）と活きた史料（文化史的価値）にあるとしている。そして、この二つの価値は発句に盛られるよりも、恋の座に見い出されることのほうが多いのである。われわれは芭蕉を正しく理解するために、俳諧を俳諧として大きく見つめねばならない。

私が目をとおした二十六種の古典の教科書はすべて芭蕉を取りあげていた。芭蕉の俳諧が大きな二つの価値をもっていることからして、それは正しいことである。しかし、問題は大部分の教科書が発句を中心としたその位置づけにある。恋のよまれない発句ばか

りを教える国語教育が芭蕉を正しく扱い得たとはいえないであろう。

私は幸いにして大学に学び、芭蕉に連句のあることを知ることができた。そして、『木綿以前の事』を読んで、杉浦明平と同じように驚くこともできた。しかし、世の中には芭蕉といえば〃古池や〃しか思い浮べることのできない人が多いのではないだろうか。もしそうだとすれば、その責任は芭蕉を正しく位置づけない国語教育にあるといってよい。柳田国男は俳諧研究の意義を次のように述べている。

国の文芸に対する我々の態度が、今まではあまりにも単純で、従って一生の間、まる〳〵是と関係無しに暮してしまふ人がちっと多過ぎた。出来ることならば之を改めるか、少なくとも文芸の見方の、新しい種類を附加へる必要がある。

（『木綿以前の事』三〇三ページ）

われわれはわれわれの祖先の生活を知り、その考え方・見方にふれ、自己の人間形式に役立てるために、国語教育の中で古典を取り扱っていることを忘れてならない。

参考文献

笑の本願　柳田国男　昭21・1　養徳社
木綿以前の事　柳田国男　昭17・11　創元社
俳諧評釈　柳田国男　昭22・8　民友社
女性と俳諧（定本柳田国男集第七巻所収）　柳田国男　昭37・11　筑摩書房
七部集の話（定本柳田国男集第七巻所収）　柳田国男　昭37・11　筑摩書房
俳諧評釈続篇（定本柳田国男集第十七巻所収）柳田国男　昭37・6　筑摩書房

――昭和38年1月15日稿――

（広島県立呉三津田高等学校教諭）